

清潔な水と緑の山は金銀の山より貴重

ヴィジャイ・プラシャド著、脇浜義明訳 田中一弘補訳 *脚注は訳注

Tricontinental :Institute for Social Research, 2025年2月13日



Chitra-Ganesh-United-States-Sultanas-Dream-one-of-27-linocuts-2018

植民地時代の劣等感の霧の中に迷い込みながらも、植民地主義の破壊を超えた世界を想像するアジアの作家たちがいた。1835年にカイラス・チャンダー・ダット（1817～1859）は『1945年の48時間の記録』という面白い小説を書いた¹。これは『カルカッタ文学新聞』に掲載された小説で、あの有名なフランスのSF作家ジュール・ヴェルヌ（1828～1905）がまだ7歳のときに出版された。厳密に言えば、これはSFというより、未来小説であった。18歳のダットの作品の冒頭を引用すると、「インドの人々、とりわけ大都市の人々は、この半世紀間、あらゆる種類の従属的抑圧に苦しんできた・・・（中略）・・・電光石火の速さで、かつて穏やかな住民であった人民の間に反乱の気運が広まった」と、未来の1945年の2日間の大衆蜂起を想像して、この小説は描き始められた。ブーブン・モフンという名の25歳の男が英国支配に対する反乱を指導、敗北し、処刑された。この小説の後の数十年間に植民地世界を超える世界を想像したフィクションが数冊ベンガジで出版された。ダットのいとこのジョシー・チャンダー・ダット（1824～1885）は1845年に『オリッサ共和国：20世紀の実録ページからの年代記』（The Republic of Orissa: Annals from the Pages of the Twentieth Century）を出版し、1882年にはヘムラル・ダットのミステリー『ラハシャ』（Rhasya）、1884～1888年にはパンディット・アンピカ・ダット・ヴィヤスの奇想天外な物語『アシャリヤ・ヴリタント』（Ascharya Vrittant）、1896年にはSFの父と言われたジャグディッシュ・チャンドラ・ボースの気候コントロールを扱ったSF『ニルデシェル・カヒニ』（Niruddesher Kahini）、1905年にはベグム・ロケヤ・サカワット・ホセインの『スルタナの夢』（Sultana's Dream）などがある。最後に述べたベグム・ロケヤの小説は本格的なSFで、彼女はテクノロジー（空飛ぶ車、太陽光発電、ロボット農業）が人類を家父長制から解放すると想像している。

インドと同じように、中国でも清王朝末期の圧政と外国による半植民地的支配に対し、反乱と解放を想像する作家たちがいた。梁啓超はジュール・ヴェルヌの『海底2万マイル』（Twenty Thousand leagues Under the Sea）を中国語に翻訳し、自分の作品『新中国未来紀』を書いた。科学が人類を解放するというヴェルヌの予言的SFは梁啓超と魯

¹ : Kylas Chunder Dutt, A Journal of Forty-eight Hours of the Year 1945。インドで初めて英語で書かれた作品。

迅を励ました。魯迅は当時最も影響力の強い作家で、彼もヴェルヌの作品の一つ『月世界へ行く』(From the Earth the Moon)を翻訳して1903年に出版した。1960年代、中国が世界の重要国となろうしているとき、梁啓超は上海万博を中国民族主義的立場から描いた作品を出版した。ベグム・ロケヤが太陽光発電をベンガジの解放のためのエネルギー源と想像したように、清王朝末期の中国のSF作家たちは海底旅行、風力を動力とする鉄道、水素気球を中国解放の手段になると想像した。

この反植民地的想像力では、科学が理想社会創造の道具の一つであった。



私は、現代中国思想の雑誌『文化宗衡』の最新号の論文を読んで、今述べた偉大なSFの脈脈を思い起こした。最新号のテーマは中国の生態学的移行であった。論文は一代にわたって大変化が起きている分野からの報告であったが、雑誌の3論文が描いていたのはSFに他ならなかった。ほんの10年前、例えば北京の空気の汚れはひどいものだった。いつの間にか顔に煤が集まり、よく分からない化学物質の膜ができたものだ。この状況に不安を抱いた国務院は2013年に「大気汚染防止行動計画2013～2017」を発表した。1兆7000億人民元を投じた10の政策措置であった。発表後10年以内に、主として炭素燃料使用の削減のための集中的努力によって、首都の大気は劇的に良くなった。当時の環境保護副大臣の潘岳は、2004年に、「グリーンGDP」、つまり環境破壊を伴わない経済成長を計算する研究会に参与した。2012年の第18回中国共産党大会では生態文明と呼ばれる経済発展枠組みが提案された。すでに2005年に、当時浙江省党委員会第一書記だった習近平は「清潔な水と緑の山は金



都の大気は劇的に良くなった。当時の環境保護副大臣の潘岳は、2004年に、「グリーンGDP」、つまり環境破壊を伴わない経済成長を計算する研究会に参与した。2012年の第18回中国共産党大会では生態文明と呼ばれる経済発展枠組みが提案された。すでに2005年に、当時浙江省党委員会第一書記だった習近平は「清潔な水と緑の山は金

Shang Yang (China), Remaining Water-1, mixed media, 2015.

銀の山と同じぐらい貴重」というビジョンを提起し、それが広く宣伝された。

『文化宗衡』編集部のジョン・ジアとティンス・チャク、及び私のトリコンティネンタルが共同作成したレポートは、雲南省の洱海が中国で最も汚染された湖から最もきれいな湖に変化した過程を述べている。この浄化を促進したのは4つの要因である。1) 湖畔で生活している人々の強い決意、2) 住民の短期的必要性和環境保護の長期的必要性のバランスを考慮した地元政府の統制、3) 湖の汚染の原因を研究し、事実に基づいた水質浄化計画を立てた地元科学界の専門的知識、4) 政府の科学政策を全力を尽くして実行する中国共産党幹部の決意。私がこのレポートを高く評価するのは、それがグローバルサウスのどの国でも実施できる可能性を示しているからだ。



Pan Yuliang (China), Penguins, 1942.

レポートにある安徽師範大学の丁玲教授とニューヨーク市立大学の徴俊教授の共同論文、及び経済学者でブラジル土地なし農民運動の指導者ジョアン・ペドロ・ステディールの序文は、生産の向上と環境保護の両方を重要とする生態学的農業の必要性を論じている。しかし、両者の融合はどうして可能なのか？ 例えば、蕪湖郡から改名された万地区では、ザリガニに値段が高いので、東巴村協同組合の農民にとって池でザリガニを直接養殖の方が利益が大きかった。しかし協同組合は稲作とザリガニ養殖を統合した複合農業を採用する政治的決断をした。それは二つの理由からである。1) 米は地域の主食であるから、共同組合にとって稲作で食料主権を確保することが重要であった。2) 稲わらを田んぼに戻して、次のシーズンのザリガニへの豊かな栄養資源として、ザリガニの生産量も増やした。専門家の科学者が水質を改善するために定期的に来て、有効な菌類やバクテリアを培養する。これが成功した証拠として、この地域ではめったに見られなかった白サギが田んぼに戻ってきた。

レポートの三つ目の論文は、北京大学の封凱棟教授と陳俊廷教授の共同論文で、中国の新エネルギー自動車産業、つまり電気自動車産業を見事に説明している。米のテスラは有名なグローバル・ブランドだが、テスラの市場シェアを中国製電気自動車が脅かしている。オモダやMG（どちらも国営企業）やBYDやオラという中国製電気自動車である。これらはアジアで欧米の自動車よりよく売れており、主として中国技術で製造されている。ノルウェーのオスロは一人当たりの電気自動車の割合が世界一高いが、絶対数で見ると北京と上海が一番多い。北京と上海の道路は不気味なほど静かで、電気自動車やオートバイが静かな低音で走っている。中国が内燃機関の轟音という難

題を解決できた理由は二つである。一つは、政府が石油化学資本に縛られていないこと、二つは、中国の技術部門（例えば運輸や情報部門）が協力しあい、自分たちを別個な営利企業と見ていないことだ。



Huang Yuxing (China), Land of Growth, 2015–2016.

2019年、陳秋帆が『荒潮』という小説を出版した。これは人間と人間以外の生物に様々な生化学的災害をもたらす電子廃棄物でいっぱいの架空のシリコン島に関するデストピア小説である。地元民から「廃棄物人間」と呼ばれる移民労働者は「青緑色のLEDライト」を発光するクラゲに囲まれて暮らしている。有害な水を濾して使っているが、長期にわたって有害物質に接触しているために、皮膚がただれ、はがれている。あるとき、小説の主人公であるシリコン島の最下位カーストの「廃棄物少女」ミニは、死んだ犬に出会う。死んだ犬は、彼女が近づくと、尻尾を振った。犬の体が技術が廃棄した化学物質と残骸によって蘇生したのだ。陳の小説は環境破壊の恐怖を見事に描いている。それはSFというよりは、現場報告、電子廃棄物処理センターだった広東省の貴嶼鎮のドキュメント、あるいは太平洋ゴミベルト（浮遊プラスチック等が北太平洋循環の海流等の影響で集中した20万平方キロメートルの海域）での生活を描いた小説として読める。作者の陳自身が、自分の小説はデジタル社会が排出する金属と化学物質で汚染された貴嶼鎮の現実に大まかに基づいている、と言っている。

2013年貴嶼鎮地方政府は、リサイクル部門を擁して環境規制を強化した工業団地の建設を始めた。2年後工業団地が完成すると、小規模なりサイクル工場のほとんどが閉鎖され、大規模なりサイクル工場が団地内に移転した。2018年、中国政府は電子機器、プラスチック、繊維などの廃棄物、24種類の廃棄物の輸入を禁止した（そのほとんどはグローバルノースからの輸入）。これによって、貴嶼鎮は巨大な量の新しい廃棄物を扱わないで、環境破壊の歴史的残余の処理をするだけになった。貴嶼鎮の歴史は『荒潮』に新しいエンディングを書くことになるだろう。

Monthly Review は、必ずしも MR Online に再掲載された記事で伝えられているすべての見解に従っているわけではありません。私たちの目標は、読者が興味深く有益だと思うさまざまな左派の視点を共有することです。—編集部

ヴィジャイ・プラシャドについて

ヴィジャイ・プラシャドは、インドの歴史家、編集者、ジャーナリストである。Globetrotter のライティングフェロー兼チーフ特派員で、LeftWord Books の編集者であり、Tricontinental: Institute for Social Research のディレクターでもある。中国人民大学重慶金融研究所の上級非居住者フェローだ。『The Darker Nations (『褐色の歴史』) や The Poorer Nations など20冊以上の著書がある。最新の著書に Struggle Makes Us Human: Learning from Movements for Socialism (『闘争は我々を人間にする: 社会主義運動から学ぶ』) と (ノーム・チョムスキーとの共著) The Withdrawal: Iraq, Libya, Afghanistan, and the Fragility of U.S. Power (『撤退: イラク、リビア、アフガニスタン、そして米国権力の脆弱性』) がある。

